# 「おさしづ」第３巻における「本部事情」と「道」

おやさと研究所講師
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第３巻（明治26～28年）の、本部事情に関する伺いの「おさしづ」における「道」の用例を整理する。本部事情に関する「おさしづ」は121件あり、「道」という言葉は38件で用いられる。そのうち19件では、1件の「おさしづ」のなかで３回以上の用例がある。

## 「道」の場面

「本部事情」として分類した「おさしづ」のなかで、もっとも多いのは教会本部の土地・建物の普請に関する伺いである。次に多いのは、教会の取り扱いや別席のお運びなど教会本部の日々のつとめ方に関する伺いである。これらの「おさしづ」が、あわせて約70件ある。しかし、その「おさしづ」では「道」が用いられることは少なく、３回以上の用例があるのは僅か４件である。普請や教会の取り扱いに関する「おさしづ」は、願の筋が具体的で明確である。それに対する「さしづ」では「許し置く」などと言われて、「道」を用いて何かを諭すということはほとんどない。３回以上「道」が用いられているものも４件あるが、それらは教祖10年祭や初代真柱の身上が念頭におかれた伺いであり、他の「おさしづ」とは少し性質が異なるものである。

それに対して、「江洲水口に於ておふでさきを販売せんとする事情に付伺」（さ27・１・25）や「医薬の件に付、必ず医師の診察を経て御道上の御話する事情の願」（さ26・10・17）など、何かの事件や事情に対する伺いの「おさしづ」では、「道」という言葉が多く用いられている。このところから、事情が起こってきたなか、教会本部としてどのように歩みを進めるべきか、その心の治め方について「道」という言葉を用いて諭されていると考えられる。

## 「往還道」は難しい

目の前にある事情について「さしづ」するにあたり、教会本部の現状について「道」という言葉を用いて次のように述べられている。

> 「今の一時世界の道を通したる。……言う事も聞かず、どうもならんから世上の道を通したる。往還道、どんな邪魔があるとも知れん。何にも案じる事要らん。……善い事目論めば善い理が回る、悪い事目論めば悪い理が回る。この道賢い者から出来た道やない。これから一つ定めてくれるがよい。」（京都羽根田文明なるもの天輪王弁妄と題する小冊子を著述し攻撃せしにより、反駁して宜しきや、又訴訟にても起こして宜しきや伺　さ26・9・1）
>
> 「艱難の道、世上現われてこうのうという一つの理。たゞ一時不思議やなあ、忌ま〳〵しいなあという事情、こりゃ大変違う。あちらからもなあ、こちらからもなあ、どうでもやってみよかと思うなれど出来やせんで。大道々々と言う。どういう怪我無いとは言えん。往還道は踏み被り無い筈なれど、心に油断があるから踏み被ぶる。何ぼ細い道でも、心一つの理さえ治まれば踏み被りは無い。これも話説いてある。一時尋ねる処、一時防ぎは出けんと思う。一つ大変と思う。まわし〳〵一つの事情、さあ〳〵多くの中どんな者も居るやろう。」（江州水口に於ておふでさきを販売せんとする事情に付伺　さ27・１・25）

このように、教会本部の当時の状況は、「世界の道」「世上の道」「往還道」を通っているところだと言われる。「往還道」というと結構なもののようであるが、それは「どんな邪魔があるとも知れん」あるいは「心に油断があるから踏み被ぶる（筆者注：踏み外す）」ものであると戒められている。こうした、「世界の道」や「往還道」という言葉を用いた諭しは、「これも話説いてある」と言われるとおり、第１巻の刻限や本席身上伺において、教会が設置されるようになったこととの関連で、繰り返し説かれている事柄である。第３巻のこの時期には、教勢はどんどんと伸び広がり、教会も次々に設置されているが、その状況について、「今の一時世界の道を通したる」ものであり、それは大きくなるほど治めるのが難しいものであると改めて戒められ、「この道」がどのようにして成ってきたかを心に治めることが肝心であると諭されている。

## 道を付けて来たは神の利やく

「この道」がどのようにして成ってきたかについては、次の「おさしづ」に端的に説かれている。

> 「差し上げて了うと言うた初めの理を聞き分け。一つの道、一つの理、一つ心、これ三つ一つ欠けてもならん。どう成っても案じる事は要らん。日々盛大の道を見れば、皆頼もしやろ。手を措いて思やん。……あちらへ行けば草だらけ、それから踏み込み、だん〳〵始め掛けた道〳〵。怖わい〳〵頼りさえせにゃよいと逃げて了い、何事も真にする者無かった。……何も無い処よりそれ〳〵だん〳〵道を付けて来た。道を付けて来たは神の利やくとも言う。神の働きとも言う。」（事情願、同日……本席の御機嫌伺いに出でし際の刻限　さ26・２・６）

「日々盛大の道」とは、教勢が伸び広まっている当時の状況を指している。それを皆は頼もしいことだと思っているだろうが、「手を措いて思やん」するように促される。それは、「この道」の根元についてである。草だらけのなかを少しずつ踏み固めるようにして、何も無い処からだんだんと道を付けてきたと言われ、「道を付けて来たは神の利やくとも言う。神の働きとも言う」と説かれる。こうして、「神の利やく」「神の働き」があってこそ、「この道」の今があるという根元を忘れぬよう諭されている。

おわりに、「天理教」という言葉遣いについて触れておきたい。「おさしづ」本文には「天理教」という言葉が２回用いられているが、その一つが第３巻にある。それは、「又候大層時姿を眺め〳〵、運ぶ処一時道分からん。……世界盛大、天理教盛大、たゞ一つ元出してみよ。」（昼のおさしづにより夜深教長外五名にて御願　さ27・11・17）というものである。この「おさしづ」と、今回取り上げた「今一時の道」という諭しをあわせて考えれば、「おさしづ」において、「天理教」という言葉は、いわば「世界の道」に相当するものとして用いられていることが分かる。